

宗教倫理学会第22回学術大会プログラム

2021年10月30日(土)

オンラインにて

9:05 入室開始

9:25 開会の辞

【研究発表(午前の部)】

司会：那須 英勝

9:30~10:00 発表者① 大田 祐慈(龍谷大学)

10:05~10:35 発表者② オバーク・アンドリュー(高知県立大学 OBERG Andrew)

10:35~10:45 休憩

司会：小田 淑子

10:45~11:15 発表者③ 宇田川 千帆(國學院大學)

11:20~11:50 発表者④ 芦名 定道(関西学院大学)

11:50~13:00 昼食

【公開講演(午後の部)】

司会：堀内 みどり

13:00~14:00 渡辺 一城(天理大学)

「社会福祉がめざす地域共生社会と宗教への期待」

14:00~15:00 レスポンス：金子 昭(天理大学)・杉岡 孝紀(龍谷大学)

質疑応答

15:00~15:05 休憩

15:05~15:30 会員総会 司会：井上 善幸

発 表 要 旨

発表① 9:30~10:00

大田 祐慈 (龍谷大学)

題目: 翻訳『往生論註』による伝道の可能性

(The Possibility of Propagation through Tan-luan's Commentary on Vasubandhu's Discourse on the Pure Land)

要旨: 『往生論註』は、「他力」という語の初出であり、往相と還相回向の教理的根拠となることから親鸞の主著『教行信証』に最も引用される論書の一つである。本学会の「祈りとモダニティ」において、鈴木大拙の英訳『教行信証』で「本願」(Original Prayer)とあることの思想的意義について議論されたが、本年、稲垣氏と本願寺国際センターの英訳に次ぐものとして Jérôme Ducor 氏による仏訳が刊行された。本発表の目的は、三者の比較により、それぞれの翻訳が伝道に果たす役割を明らかにすることにある。また、『往生論註』の比喻表現の中でも、特に「如来浄華衆 正覚華化生」という句に対する注釈をもとにして作られた和讃は葬儀の場で称えられ、そこでは浄土の世界が表現される。そして、衆生を「卑湿淤泥」(la fange profonde et humide des étangs) から華の台へと化生させる菩薩の実践が、『無量寿経』の讃仏偈に説かれた「仮令身止 諸苦毒中 我行精進 忍終不悔」を初めとする大乘仏教の理念と重なることを指摘する。

発表② 10:05~10:35

オバーク・アンドリュー (高知県立大学)

題目: Exploring a Lifeworld through a Gravesite: Shikoku's First Hidden Christians

(墓地から生活世界を探究する—四国での最初の隠れキリシタン—)

要旨: The first Christian missionary to Shikoku arrived in 1559, and roughly five years later we have evidence of some initial conversions taking place, situating these developments historically as being some decades before the official prohibition of the religion was enacted by the (then new) Edo government. Under that policy, as is well known, Christianity was strictly banned, its European proponents were forcibly expelled, and its Japanese adherents (along with those Europeans who had refused to leave) made to renounce their faith or face torture and death. In Matsuyama City today we can find a signboard and gravesite commemorating these events, and it is asserted that some of the early converts were buried there, that this is their grave, and furthermore that the items it displays are not what they appear to be: that they are Hidden Christian monuments.

In our talk we will attempt to study these objects against the background of what we know about that period's Hidden Christian iconography, symbology, and conceptuality. We will seek to try and imagine their experiential lifeworlds, applying phenomenological methodology within the historical and the notional. The sanctified area itself exhibits what might be expected of Hidden Christian spatiality: a quasi-Buddhist nature, syncretistic Shinto elements, and offertory tools; yet each of these would be quite out of place in any other "Christian" context. We must wonder then: What may the sacrality of this ground

have entailed for those who visited it? What significance did its objects contain for their creators and participants? Moreover, could a site such as this have been somehow “ecumenical”? If so, in what ways, considering that one half (the Christian) for political reasons must have been kept disguised while the other half (Buddhist/Shinto) was allowed to be open? We will pursue these questions, and although our thoughts will be framed in the past, we may find some interesting conclusions for the present that can help point us in applicable ethical directions.

発表③ 10:45~11:15

宇田川 千帆 (國學院大學)

題目: 日本の公教育における宗教教育—道徳教育の効果を評価するアンケートから—

(Religious Education System in Japan-A survey of Impact of Moral Education in Schools-)

要旨: 公教育における宗教教育は、主に道徳教育や倫理教育との関連から論じられることが多く、公立学校においてどのように宗教を扱うべきかを議論する延長線上に、道徳教育の内容がデザインされていくという面もある。教育基本法や学習指導要領の変化により、宗教の知識教育に関する部分の教育はその幅を広げられてきたように見える一方で、どのように宗教を扱うかという課題は残されている。

その一つの議論として、宗教情操教育を公教育で、どのように、どの程度なされるべきかというものがある。これについて考える一つの視点として、宗教系の学校における宗教教育の道徳教育的効果を評価することによって、宗教に関わる教育をすることで道徳教育的効果が得られているのかを調べることができる。さらに、同じ評価を公立学校に用いることによって、宗教教育をしない道徳教育の効果の結果と比較することができるのではないかとこのものである。

発表④ 11:20~11:50

芦名 定道 (関西学院大学教授)

題目: 「東アジアの公共性とキリスト教: 宗教・民族・市民社会」

(East Asian Publicity and Christianity: Religion, Ethnicity, Civil Society)

要旨: 東アジア(中国・朝鮮半島・日本)は古代より、宗教に関しても相互交流が盛んに行われ、それぞれの地域固有の宗教の上 に、儒教、仏教が重なり合う仕方で、重層的な宗教文化が形成されてきた。しかし、近代の到来によって、この共通の重層的な 宗教文化は大きく揺らぎ、現代においては東アジアの宗教文化には地域によって大きな相違が見られるようになった。今回の研究発表では、この現代の東アジアの宗教文化の多様性をキリスト教と公共性という観点から分析することが試みられる。東アジアの宗教文化が公共性の領域でいかなる可能性を持つかについて考えてみたい。

公 開 講 演

「社会福祉がめざす地域共生社会と宗教への期待」

渡辺一城（天理大学人間学部人間関係学科社会福祉専攻）

講演要旨

孤立死・孤独死、子育て不安、依存症、引きこもり、生活困窮など、生活にかかわる問題はすべて我々が生活を営む地域で起こっている。こうした問題は多様化・複雑化し、その解決には公的制度によるサービスの利用や専門職による援助だけでは限界があり、地域住民など様々な関係者による自発的な支援（インフォーマルサポート）が重要となってくる。地域住民や行政、専門職、その他関係者等との協働により、支援を要する人たちが安心して地域で生活を送ることができるよう、またそれが可能な地域づくりをしていこうという営みの総体が「地域福祉」と呼ばれるものであり、こんにちの日本の社会福祉の基本的方向となっている。

近年では地域福祉推進のため国の具体的な政策目標として「地域共生社会」の実現が目指されているが、その意は「制度・分野ごとの『縦割り』や『支え手』『受け手』という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えつながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会を目指すもの」である。とくに支援の「支え手」「受け手」が固定化されるものではなく、支援される側を支援する人に変わる可能性があるものとして捉える思想を有するところに地域共生社会という社会像の特徴がある。

これまでの社会福祉において、人間の尊厳といった倫理や価値基盤の形成、施設事業や地域福祉活動など社会福祉実践主体としての役割、社会福祉人材養成など、宗教が果たしてきた役割は極めて大きい。社会福祉状況の変化や進展に伴い、宗教に求められる役割も改めて問い直されなければならない。

宗教による社会福祉、とくに天理教における社会福祉実践と思想を踏まえながら、これからの地域共生社会実現に向けた宗教の役割について考えていきたい。